

現代アメリカ口語英語の文法と言語思想史的歴史的背景

後藤弘樹

古来より日常一般庶民が意思疎通をはかるかけがえのない道具としての言葉のルーツの一端を歴史的に言語思想史の観点から文学作品を通して実証的に論じることとする。本稿では、本動詞の補助として現在も俗語・方言を含む口語英語で盛んに使われている中世英語時代 (Middle English, 1150-1500) からの残存語とも言うべき一般庶民の話し言葉、特に元ミシガン大学名誉教授 Charles Carpenter Fries 先生が自著、*American English Grammar* (VIII The Uses of Function Words, p. 128) でいう be“is, am, are, was, were”, do“do, does, did”, have“have, has, had”などの基本的な機能語 (Function words), 一般には別名助動詞とも言われているこれらの語の語法について、特に“be”動詞を中心に的を絞り論じていくこととする。人と人とのコミュニケーションを司る大切な心情がこもった発話 (utterance) の中で織りなす微妙な話者の心理状態を如実に映し出す鏡とも言うべき話し手の言葉の表現の綾や意図、及びその深層心理から去来する様々な、微妙で複雑な思考状態を反映している英語表現語法を“be”動詞を中心に英米の文学作品を通して考察することとする。

はじめに

言葉、特に話し言葉 (Spoken language) は未来永劫にわたって、永遠に不変ではない。何故ならば、日常コミュニケーションの道具として頻繁に使われている、生気を帯びた血の通った人間の口からほとぼしり出る言葉は常に生命力のこもった生き物であるからである。少しオーバーに誇張して言えば、特に一般庶民の話し言葉に至っては時代により、居住地域や社会環境、経済的背景などの要因によって、また話者である話し手の職種や教養の程度により、古来より使われている言語も実に多種多様で、それなりに変化に富んで生き生きとして躍動感に溢れている。

言語思想史的観点から少し概観すると、言葉が変化していく主要要因の1つは本質的には常に言語的節儉 (Linguistic economy) や錯覚 (illusion), 類推 (analogy), 聞きちがひ (mishearing) などに起因することが多い。特に中世英語時代 (1150-1500) から近代英語時

代（1500-）にかけての文法上最も著しい変化の特徴は市川三喜編『英語学辞典』607ページによると、1066年のフランスの William, Duke of Normandy（ノルマンディ公ウィリアム）がイギリスを征服して王位についたことである。このノルマン人のイングランド征服（Norman Conquest）が契機となって、それまでの「複雑な音声上・文法上の変化が著しく促進され語尾屈折が簡略化・水準化」したことであった。即ち、音韻変化と類推によって複雑な語尾変化が数種の語形に統一されたことであった。庶民の言葉は常に感情のおもむくままに Linguistic economy という、言わば最小の発話努力で最大の発言効果をあげることを主眼として、時には聞き手に注意と喚起を促すために、人は古来より常にレトリック（rhetoric）を最大限に駆使して大胆に説得力のある力強い表現をしようと試みるのが常である。

先ず言語の変遷過程に触れる前に、当時の庶民の言語教育の実態から概観する。16世紀や17世紀の頃には未だイギリス全土で統一した学校教育も、文法教材としての School grammar も、また定められた基準も一切なく渾沌としていて、日本で言う江戸時代のいわゆる寺子屋（private elementary schools in the Edo Period）に相当する村の小さな教会などで主として布教の一環として聖書を通して、教育もまちまちの宣教師達や教会関係者達から読み書きも心もとない人達に、また Sunday school と称してその地域の子供達の教育指導（読み書き）に当たってきたものと思われる。従って、当時はイギリス全土で統一した学校教育の基準も無く、地方地方で異なり、家庭では代々親から子、子から孫に至るまで、両親や祖父母や村の年長者達から聞き及んだ言葉が、そのままその地域のその時代の彼らの話し言葉のお手本となり、彼らの話し言葉のもととなった。従って、当時の人々は難しく複雑で変則的な語尾変化や屈折を伴った文法規則には容易に馴染めず、出来るだけ簡素化され、一般化した馴染みやすい方策をコミュニケーションの手段としたのである。例えば、今日言う複雑な面倒な文法規則を廃して手っ取り早く、最も簡単な方策として、“is” や “do, have” 等の基本（助）動詞を変化させずに全人称形に用いるという安易な手段をとったのである。勿論、この方が教育も乏しい一般庶民には馴染み易く、簡単であったからであるということはいふまでもない。これが今日も英米に残存している地域言語（regional language）、即ち、個々の文献に今も残る所謂その地域、地域の話し言葉（俗語・方言）の全体像である。そうしてこの語法が彼らの居住地域でコミュニケーションの重要な道具として長く使用され、その地域の居住者達の話し言葉となって代々広がっていったと言える。その理由について、特に17世紀のイギリス本土からの文化的流入のほとんどない新大陸のアメリカでは、Vance Randolph and George P. Wilson は *Down in the Holler*, p. 71 で、“It is not difficult to see how this condition has come about. Nearly all of the Englishmen who settled the American colonies came over in the first half of the seventeenth century. . . . There was

comparatively little communication between England and America; it required nearly four months to cross the Atlantic, and the voyage was an expensive and disagreeable venture at best. The condition of the colonies was not favorable to literary development, and not many English books of the period found their way to our shores.”と述べている。

一方、信仰（宗教）の自由を求めてイギリスのみならずヨーロッパ各地から人々が入植した当時のアメリカでは、その後本国イギリスからの新たな文化の流入や人の往来はおろか人的交流すらほとんどなく、唯一の文化的知的財産は肌身離さずアメリカに持ち込んだ聖書のみで、毎日、日々の激しい農作業を終えた夜にランプの薄明かりのもと、繰り返し繰り返し聖書の熟読と聖書の教えに忠実に従い、日々のわだかまりや心の救済に明け暮れる敬虔な清教徒達（the Puritans）であり、外界と長く隔絶された状態が続いた。従って、元を正せば今日のアメリカの英語方言（北部方言、南部方言、中部方言、西部方言）は、そもそも17世紀にアメリカにイギリス各地（England, Ireland, Scotland, Wales）から渡来した多くの英語を母語とする人達の他にヨーロッパ各地からも信仰の自由を求めて新大陸にやって来た人達が多数いたことである。そうして大まかに言えば、彼らは母国の出身地で話していた言葉をそのままの形でそっくりアメリカに移植し、やがてそれが英語と入り混じり年月を経て出来上がったのがアメリカ各地に今も残るアメリカ英語方言のそもそものルーツ（土台、起源）であると言うことが出来る。特にアメリカ東部を南北に走るアパラチア山脈（Appalachian Mountains）やミズーリ州南部やアーカンソー州北部、オクラホマ州東部にまたがるオザーク（Ozarks）奥地の辺境地帯に住んでいたイギリスからの開拓者達は第二次世界大戦（World War II, 1939-45）の頃までシェークスピア時代の英語、即ち、17世紀のエリザベス朝期の頃の話し言葉が色濃く残っていたと言われている言語を話していた。その件りを少し引用すると、

Therefore, although the English language in England changed rather rapidly during the eighteenth century, few of these changes affected the speech of the American colonies. Even at the time of the Revolution the average American spoke the English which the settlers brought over in the seventeenth century, although many of their words and phrases were already obsolete or provincial in England. James Russell Lowell doubtless exaggerated when he said that American colonists spoke the English of Shakespeare, but it is true that they were familiar with much of Shakespeare's vocabulary and many of their idioms and grammatical irregularities were Elizabethan. As early as 1792, Jeremy Belknap pointed out that many so-called Americanisms were but survivals of old or provincial England.

——Vance Randolph and George P. Wilson, *Down in the Holler*, p. 71-2.

また交通・通信機関が極めて劣悪な人里離れた奥深い山間部で質素な生活を旨とし、厳格な宗教的思想・信条の理念のもとに、およそ文明の恩恵をかたくなに遠ざけてきた原理主義的な宗教感を持った人達や英国人の党首ウィリアム・ペン（William Penn, 1644-1718）に率いられたクエーカー教徒達は、1681年にペンシルヴェニア（Pennsylvania）に植民地を開設した。またペンシルヴェニア南東部には、彼の呼びかけに応じて宗教的迫害から逃れ信仰の自由を求めてやって来た南ドイツやスイスからのアンマン派（the Amish）、メノー派（the Mennonites）、ダンカー派（the Dunkers）、モラビア派（the Moravians）、シェベンクフェルト派（the Schwenkfelders）などの人達もいて、彼らを総称して Pennsylvania Dutch（ペンシルベニア・ダッチ、即ち、ドイツ・スイス系ペンシルヴェニア州人）と言う。“Dutch”は“Deutsh”（ドイツ）の意味である。彼らは努めて聖書に忠実に従い、勤勉で簡素な生活と質素な身なりを信条として、それぞれの信仰としきたりをかたくなに保持しながら母国を離れるまで話していた高地ドイツ語プファルツ方言に、英語が入り混じった言葉を話し、日々の生活の生きる糧として聖書を厳格に信奉してきた。結果として総じて現代になっても新大陸のアメリカには中世英語時代の頃の話し言葉が多数残ることとなり、科学文明の進歩した今日から見れば実に魔可不思議な別世界であった。

従って、Albert H. Marckwardt が *American English*, p. 4 で述べているように、母国イギリスの英語とのあまりの違いから、このままで推移すると、両者はどんどん離れていって、やがて近い将来全く異なった言語を話す国家・国民になっていくのではないかと当時 *The Baltimore Sun* 紙の特派員で三巻からなる *The American Language* を著した、H. L. Mencken (1880-1956) は危惧の念を抱いた。そして、彼をして、“Mencken at that time, with his attention fixed particularly on the spoken language, felt that ‘the American form of the English Language was plainly departing from the parent stem, and it seemed at least likely that the differences between American and English would go on increasing.’” とまで言わしめたのであった。しかし一時期大西洋という両国を隔てた大きな容易ならざる障害で隔絶され、交通、通信、文化や人の往来はおろか人的交流すらほとんどまならなかった期間が長く続いたために言語（音韻、文法、語彙、語法）もお互いに独自の発展をとげてきた面があった。特に17世紀のイギリス英語がそのままの形で移植され、その後の目立った大きな変化もほとんどない旧態依然のままの状態のアメリカ英語ではあったが、Robert Burchfield (*The English Language*, p. 36) によれば、とりわけアメリカが母国イギリスから政治的に独立した1776年頃までは、イギリスの言語と驚くほど大きな差は認められなかったそうである。

In 1776, at the point of political severance between Great Britain and the United States, except for a small infusion of words from east coast Indian languages, The English language of North America was not in any radical way dissimilar from that of the land the American settlers called the mother country. George Washington and Lord North would not have detected any more than trivial differences in the other's vocabulary and mode of speaking. ——Robert Burchfield, *The English Language*.

しかし英米において言語の面で顕著な違いがはっきりと認められるようになったのは開拓者達が母国イギリスを離れた後にイギリスで起こった大きな変革といううねりであった。即ち、1760年頃から19世紀にかけて機械や動力などの発明や紡績機械の改良に端を発してイギリスで起こった産業革命がイギリス社会や経済上にもたらした急激な目まぐるしい諸変革で、経済、文化、社会はもとより市民生活全般にわたって大きな影響を及ぼし、ひいては言葉そのものにも音韻、文法、語彙、語法の面で大きな変化が起こったことであった。かたやアメリカでは入植以来新大陸での未知との遭遇はせいぜい異文化や異人種達との接触や交渉・取引位であった。一例を挙げれば、生活面や活動分野を表す語彙をアメリカ・インディアンから、毛皮採取を目的とし入りこんだフランス人からは衣服、織物、家具、料理、農場文化を反映しているスペイン人からは農場生活の法律・刑法制度、またオランダ人からは社会階級を表す語彙、ドイツ人からは飲食物などを表す幾つかの重要な語彙を、とりわけ、イギリス本国では出会うことのない珍しい動植物、風景、生活様式などを表す語彙を数多く借用して取り入れた位で、言語自体にはたいして大きな変革を及ぼすほどでもなく、アメリカでの英語の全体像は新大陸を目指して母国を離れた開拓当初の17世紀のままの英語であったと言ってもいい位であった。これに対して大変革を起こしてにわか近代化を目指し大躍進を始めたイギリスから見れば、アメリカでは相変わらず母国イギリスで既に廃れてしまって社会から姿を消して陳腐となった英語(語彙)を依然として使い続けていたことと、その上アメリカの発音や文法、語彙・語法全てにわたって古いイギリスの昔のままで推移していたことで、彼らの古くさい時代遅れの英語そのもの自体にイギリス人達は嫌悪感すら覚え、ひどく忌み嫌ったのである。このあまりの違いや違和感から本国のイギリス人達をひどく嘆かせ、アメリカ英語のことを粗野で下品で品格のない無教育者の英語とさえ酷評し、イギリス英語はアメリカ英語と別個の言語であるとさえ考えられるに至ったのである。その件を Stuart Berg Flexner (*I Hear America Talking*, pp.8-9) から引用すると、

“It wasn't only our words that the English disliked, but our pronunciation and grammar as well. They jeered when we said 'missionary' instead of 'mission'ry,' 'shew'

for 'show,' and 'whare' and 'bhar' for 'where' and 'bear.' In 1822 visitor Charles Dickens said that outside of New York and Boston all Americans had a nasal drawl and used 'doubtful' grammar. In 1832 Mrs. Trollop said that during her visit in America she seldom heard a correctly pronounced sentence. And in 1839 visitor Captain Frederic Marryat said it was remarkable how debased the English language had become in such a short time in America."

しかし現在のアメリカでは、科学文明も驚異的に進歩・発達を遂げ、学校教育も充実し、ラジオ、テレビ、新聞、雑誌と全土で統一した言語を使い、たとえ交通手段もないような遠隔な人里離れた辺鄙な地域でさえも場所により未だに多少依然としてイギリス各地の古い地方方言が入り交じった言葉を話す年配の住民がいても、また双方でお互いに独自の発展を遂げた言語は、音韻、文法、語法、語彙の点でそれぞれの言語学的特徴からイギリス英語 (Briticism, イギリス英語特有の語法)、アメリカ英語 (Americanism, アメリカ英語特有の語法) と、時には異なった名称で呼ばれることはあっても両者は英語という1つの共通の言語の上に立つ独立国家を形成しながらも、意志疎通には全く何の不便もない。ここで Americanism と Briticisms について *OED* から学術的な説明を引用しておく。

The first class I call Americanisms, by which I understand an use of phrases or terms, or a construction of sentences, even among persons of rank and education, different from the use of the same terms or phrases, or the construction of similar sentences, in Great Britain. The word Americanism, which I have coined for the purpose, is exactly similar in its formation and signification to the word Scotticism.

——Witherspoon, *Pennsylvania Journal* (*OED*).

A phrase or idiom characteristic of Great Britain, but not used in the England of the United States or other countries. —— *OED*.

従って、昔の時代と比べると現在の言語事情ははるかに想像も及ばないものであった。そこで本稿ではアメリカで現在も使われている中世英語時代からの話し言葉の残存語の主な実態の一端に的を絞り、言語思想史の観点から文学作品を通して本来言語が本質的に持つ言葉の保守性と珍奇な目新しさを好むという相反する言語が持つ二面性にも目を向けて実証的に論じることにする。

1. “be” 動詞の語形変化

アメリカの俗語・方言を含む口語英語では単・複の人称にかかわらず、現在形は“is”，過去形は“was”を用いることが多い。表にすると次のようになる。

人称形	現在形		過去形
		(俗語・方言)	
単数形	I am you are	is	was
複数形	we are you are they are	is	was

OED (Oxford English Dictionary) によれば、In the northern dialect, ME. and mod., *es*, *is*, *ys*, is used for all persons of the sing., and also for the plur., when not immediately joined to the nom. pron., e.g. when the subject is a noun or relative; the latter usage is exceedingly frequent in the Shakespeare folio of 1623 (though much altered by editors ignorant of its history.) と詳しく説明し、“is”は1300年頃から単複の現在形の人称に用いられていたことが記されている。また過去形の“was”についても、“The plural had formerly also *was*; almost universally so in 16-18th century with *you* when used as a singular. Still *dial.* in all persons.”と述べられ、全人称形に“was”が用いられていたことが記されていて、Shakespeare, Bunyan, Fielding, Dickens からの用例を挙げている。

もう少し詳しくイギリスでの使用地域を *EDD (English Dialect Dictionary)* で概観すると、まだ文法が確立していなかった頃のイギリスでは地域によっては“are”が単複にも用いられていたことが記述されている。例えば、“I are, he are”はイングランド南東部の州 Essex, Kent, イングランド南部の Berkshire, 中部の Bedfordshire, 西部の Shropshire, Hereford で、ウエールズ南西端の Pembroke やイングランド中部の Warwick では単数、複数にも“are”が用いられていたようである。また“*They is*”はイングランド中東部の Lincoln, イングランド南西部の Gloucester で、“*We am, They am*”はイングランド南東部の Surrey, 中部の Warwick, 中東部の Lincoln, 南西部の Gloucester で普通一般に用いられていたことが記されている。

Yo' am (= You am = You are) a poor soul. ——— *EDD*(Warwick, Hertford).

We'm' (= We am = We are) and they'm' are common. ——— *Ibid.*

このように文法基準が未だ確立していなかった当時のイギリスでは、その土地土地の地域言語に統一性がなく大変複雑であったことが見て取れるのである。即ち、十分な教育もない、どちらかと言うと無学に近い庶民達には人称形によって“be”動詞を使い分けることが甚だ困難であり、面倒であった。そこで苦肉の策として、勢い全ての人称形に現在形は“is”，過去形は“was”を適用する方がはるかに簡単で、しかも効率的であったことが容易に想像でき、言語の単純一般化現象が庶民の間で自然と起こったのである。アメリカでは *Dictionary of American Regional English (DARE)* によると、アラバマ州の黒人達は“am is frequently used as third person singular as well as first person.”他方“is”は、“I is, you is, they is”と話され、これが今日主として南部、南部南域で話されている方言であって、時には複数形の人称形にも使われることが多々あったようである。これは今も特に南部の年配の教育も乏しい黒人層に圧倒的に多いとのことである。

I'se(= is) pow'ful skeered; but neversomeless I ain't gwine run away. ——— *DARE*
I'se monstrous hungry. ——— *Ibid.*

以下に現在も口語語法としてアメリカに残る一般庶民の話し言葉の一端を英米の文学作品から用例を挙げて検証することにする。

現在時制

“Here I is(=am). When is you going to lower that water bucket?”
————Erskine Caldwell, *Southways*.

“I's (=am) jes thinkin'.”Jennie said quietly.
————Arna Bontemps, *A Summer Tragedy*.

Yes; en I's rich now, come to look at it.
————Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*.

I owns mysef, en I's wuth eight hund'd dollars. ——— *Ibid.*

I'd made up my mine 'bout what I's a-gwyne to do. ——— *Ibid.*

No, Sir, an' what I say iss (=is) ———John Galsworthy, *Strife*.

“Maybe I is , and maybe I ain't. Who want to know ?”
————Saul Bellow, *Looking for Mr. Green*.

Stop right whar (= where) you is. ———William Faulkner, *Wash*.

“I don't know whether you've seen 'em, 'm,”continued Jane, after a pause, “but there's (= are) folks making haste all one way, after the front window. . . .”

——George Eliot, *Silas Marner*.

“Mr. Morris! Mr. Morris!” he yelled. “Where is you, Mr. Morris?”

——Erskine Caldwell, *Handsome Brown and the Shint-tail Woodpeckers*.

“You’s (=are) just one of them radicals, son, that’s what you are,” put in the old tenor who played Saul. ——Langston Hughes, *Trouble with the Angels*.

They’s all there. ——William Faulkner, *The Unvanquished*.

I don’t ask favors unless they is things I want pretty bad, so this time I’m asking for a favor for Pearl. ——Erskine Caldwell, *Tobacco Road*.

The boys is big enough to take care of themselves.

——Id., *The People v. Abe Lathan, Colored*.

過去時制

“You was (= were) a saying,” he observed, when we had confronted one another in silence, “that surely I must understand. What, surely must I understand?”

——Charles Dickens, *Great Expectations*.

I could have sworn you was one from that very battle!

——Thomas Hardy, *The Duke’s Reappearance*.

“Suppose, now, you get the money yourself, and save me the trouble, eh? Since you was so kind as to hand it over to me, you’ll not refuse me the kindness to pay it back for me: it was your brotherly love made you do it, you know.”

——George Eliot, *Silas Marner*.

And him as I’d gone out and in wi’ for ten years and more, since when we was lads and went halves—mine own famil’ar friend, in whom I trusted, had lifted up jis heel again’ me, and worked to ruin me. ——*Ibid.*

“Sure, I know,” said Billy. “If you was rich, it’d be different.”

——John Steinbeck, *The Red Pony*.

If you was to, I reckon these hellion boys can remind you,” Louvinia said.

——William Faulkner, *The Unvanquished*.

And one straggly-haired Irish woman who had taken quite a liking to him had ever gone so far as to tall him, blissfully unmidful of his desires in the matter, “I’d have you marry my daughter if you was white.”

——Willard Motley, *The Almost White Boy*.

尚、上記のように文法的には仮定法過去で“were”の代わりに“was”を用いるのは口語用法である。

Look here, I said, I'm an old man, I said, where I was brought up we had some idea how to talk to old people with the proper respect, we was (= were) brought up with the right ideas, if I had a few years off me. . . I'd break you in half.

——Harold Pinter, *The Caretaker*.

But we had grandtimes together when we was little.

——K. A. Porter, *The Cracked Looking-Glass*.

“Oh, said John, pondering. “I thought his eyes was generally shut. Halla ! ”

——Charles Dickens, *The Cricket on the Hearth*.

“But when you told the lawyers how I ain't never said a mean thing about Mr. Luther, or his daddy before him, in all my whole life, didn't they say they was going to help me get out of jail?”

——Erskine Caldwell, *The People v. Abe Lathan, Colored*.

“But when you told the lawyers how I ain't never said a mean thing about Mr. Luther, or his daddy before him, in all my whole thing about Mr. Luther, or his daddy before him, in all my whole thing, didn't they say they was going to help me get out of jail?”

——*Ibid.*

Miss Lucy Cannon just wouldn't call colored folks Mister nor Missus, no matter who they was, neither in Alabama nor in California.

——Langston Hughes, *Trouble with the Angels*.

They was bones ever' place.

——John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

次例のようにこの“was”は文法的に“had”の意で用いられることがある。

And therefore it need not be wondered at, if, by this time, Lord Peter was (= had) become exceeding rich.

——Jonathan Swift, *A Tale of a Tub*.

2. “do” (助) 動詞の語形変化

三人称単数現在形に“does, doesn't”の代わりに“do, don't”が用いられることがある。この用法は *OED* によれば, “The form *he do* is now south west dialect.”であるとのことであ

る。OEDには、1547年からの引用例が多数挙げられている。EDDもイングランド南東部の州 Surrey では三人称単数形に“do”を用いていたことが記されている。

人称形	現在形	
	肯定文	否定文
一人称	does	doesn't
	does	doesn't
二人称	do	don't
三人称 (単)	do	don't
(複)	does	doen't

He . . . **do** confess himself to speak of this third kind. ———OED, 1553.

He **du** zay(= do say). That he **du**. ———Ibid.

He **don't** know you. ———Samuel Richardson, *Pamela*.

God **don't** suffer them now.

————Albany Fonblanque, *England Under Seven Administrations*.

I **doesn't** know a single letter in the A B C's. ———DARE.

一方アメリカではDARE (*Dictionary of American Regional English*)によれば、三人称単数に“do, don't”, 一人称単数及び三人称複数に“does”を用いるのは主として南部や南部南域方言であると記述している。

It **do** beat all that I can't remember them Jeemes boy's horses!

————DARE

Anythin' the Lord **do** is right.

————Ibid.

It **don't** take ten thousand acres here to support one family.

————Ibid.

Does you like em, Auntie?

————Ibid.

I **does**; they **does**.

————Ibid.

A lot of people **does**.

————Ibid.

文学作品から用例を挙げると、

How **do**(=does) that come?

———— Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*.

It **don't** (=doesn't) make no difference what he said that ain't the thing.

——*Ibid.*

It **don't** cost you much to us, and me and my boys raise as much cotton as anybody else.

——Erskine Caldwell, *The People v. Abe Lathan, Colored.*

"It's a small day when the sun **don't** shine," Governor Gil said.

——*Id.*, *Southways.*

"If it comes on to rain —why a little rain **don't** hurt a horse."

——John Steinbeck, *The Red Pony.*

"Ah!" said the girl; "but you see she **don't**."

——Charles Dickens, *Great Expectations.*

"If this **don't** hurry up and cool off, I'm gonna miss my bus."

——J. D. Salinger, *A Perfect Day for Bananafish.*

She **don't** go in, he **don't** go in, the kid **don't** go in.

——*Ibid.*

"Well, now," Brown said, "you're a good kid, and you're smart, but it just **don't** pay to trust a woman."

——Norman Mailer, *The Naked and the Dead.*

He **don't** go out much.

——William Saroyan, *The Messenger.*

"That **don't** make no difference," Lonnie said.

——Erskine Caldwell, *Kneel to the Rising Sun.*

3. "have" (助) 動詞の語形変化

一人称単数現在形に俗語・方言では,"have"に代わって"has"を用いる用法がある。*OED*によれば, イギリスでは北部方言で14世紀頃に用いられていたことが記されている。同方言では13, 14世紀頃には複数形の人称形にもこの"has"が用いられていたことが記されている。また *OED* には16世紀に三人称単数現在形に"have", 逆に複数形に"has"が14世紀に北部方言で用いられていたことが記述されている。

*EDD*によると, Berks では I hev or has; Oxford では I has or haves; he, it have or haves, we, &c. has or haves, Tom have come home from school; we haves eggs for breakfast. の例が挙げられている。

DARE によれば, 資料から三人称複数現在形に"has"を用いるのはアメリカの北東部の Massachusetts 州, 北西部の Montana 州, 中西部の Ohio 州であるようであるが, 三人称単数現在形に"have"を用いるのは主としてアメリカの北東部諸州のようであり, 多くは

illiterate の人によく見られる speech のようであると同研究書は明言している。

実は、筆者がミシガン大学大学院に在学中フィールドワーク（現地言語調査）の一環としてミシガン州アナーバー市（Ann Arbor City）の市役所（the City Office）を訪れた際に対応に出た市の職員の方が“I has …”と言ったことを聞いてびっくりしたことを今も鮮明に覚えている。高学歴の人にあるまじきこととその時は感じたが、これもその土地その人に深く根付いたお国言葉（方言）の一つで、日頃の習慣的な家庭での話し言葉がついうっかり何気なく、無意識のうちにぼろっと口をついて出たものと思われる。

このようにアメリカで現在方言としてこの用法が現存しているのは、イギリスからの移住者達が持ち込み、それがそのままの形で今日まで残存して、特に教育も不十分な年配者達によく見られる言語事象で、それが今日まで残り現在にいたっているように思われるが、これもどちらかと言うと教育、ラジオ、テレビ、新聞、雑誌などの公共のマスメディアの発達した現代では甚だ教育も乏しいごく少数の高齢者達や黒人層の人達に限って見られる事例のように思われる。

人称形	現在形	
	単数	複数
一人称	has	has
二人称	has	has
三人称	have	has

Der sone, this lang quhar **has** thow beyne? ————*OED*, (1470)

Why **hase** thou vs lefte? ————*Ibid.* (1513)

I **has** a grandson ————*DARE*.

Some of 'em **has** their laundry. . . some has carpet on the floor. ————*Ibid.*

Some oats **has** been combined. ————*Ibid.*

She just **have** a part-time job. ————*Ibid.*

Johnnie George **have** lost more in her than he do know.
—————*EDD*.(Hereford, Wales)

Sure, she cannot say more than what yourself **has** (= have)said against yourself.
—————Lady I. A. Gregory, *The Full Moon*.

I'm in dread it is I myself **has**(= have)got the venom into my blood.
—————*Ibid.*

It is not always them that **has** the most that makes the most show.
—————*Id.*, *The Jackdaw*.

Mr. Luther knows I **has** worked hard and never answered him back, and only asked for rations and a few clothes all this time.

——Erskine Caldwell, *The People v. Abe Lathan, Colored*.

“For forty years I **has** lived here and worked for Mr. Luther,” Uncle Abe said, “and I ain’t never said a mean thing to his face or behind back in all that time.”

——*Ibid.*

My Lord, Rosicky, you are one of the few men I know who **has** a family he can get some comfort out of; . . .

——Willa Cather, *Neighbour Rosickey*.

上例の文は、勿論文法的には“have”が正用法であるが、口語英語では前の“one”にひかれて現在でも単数の動詞，“has”で受けることがよくある例の1つである。

Lots of the boys here **has** seen that Smiley and can tell you about him.

——Mark Twain, *The Celebrated Jumping Frog*.

俗語・方言では逆に三人称単数に“has”にかわって，“have”が用いられることがある。

And it **have** been rough with the army over there.

——Thomas Hardy, *The Grave by the Handpost*.

The Race that every man . . . **have** to runne.

——*OED*, (1559).

A point . . . is that which **have** no partes

——*Ibid.*

4. [be + 過去分詞] で完了を表す

運動動詞の完了を表す場合に口語英語では“have”動詞の代わりに“be”動詞がよく用いられる。例えば，“Spring has come.”「春が来た」に対して，“Spring is come.”「春が来ている」に見られるように、主に“arrive, come, go”といった往来や発着を表す動詞、即ち、更に具体的に言葉を換えて言うと、移動や変化などの運動を表す自動詞の過去分詞が「be + 過去分詞」の形で動作の結果としての状態に重きを置いて表現する場合に使われることが多い。

この語法は、かつて17世紀のエリザベス朝期の英語で「be + 過去分詞」の形で「have + 過去分詞」の代わりによく用いられたことの名残と思われる。この語法が現代にも残存しているのである。従って、この時代を代表するイギリスの劇作家・詩人 William

Shakespeare (1564-1616) の作品の中にこの種の表現語法が見られる。例を挙げると、

This day I breathed first,
And where I did begin, there shall I end,
My life **is run** his compass Sirrah, what news?

———*The Tragedy of Julius Caedar*, V. iii. 23-25.

By yea and nay, sir, I dare say my cousin William **is become** a good scholar.
He is at Oxford still, is he not? ———*Henry IV*, Part II, III. II. 10-12.
Cardinal Campeius **is arrived**, and lately; ———*Henry VIII*, II. i. 160.

“Hear me!”cried the Ghost. “My time **is neary gone**.”

———Charles Dickens, *A Christmas Carol*.

これに対して、言うまでもないが、所謂現在完了時制の「have (has) + 過去分詞」は動作の完了、その結果としての現在までの状態、経験、継続などを表すことに重きを置いているのは周知のことと思う。英米の文学作品から「be + 過去分詞」で運動動詞の完了を表す例を挙げると、

And therefore it need not be wondereed at, if, by this time, Lord Pete **was become** (= had become) exceeding rich. ———Jonathan Swift, *A Tale of a Tub*.

“Hear me!”cried the Ghost. “My time **is neary gone**.”

———Charles Dickens, *A Christmas Carol*.

He resolved to lie awake until the hour **was passed** (= had passed); and, considering that he could more go to sleep than go to Heaven, this was perhaps the wisest resolution in his power. ———*Ibid*.

She **was come** (= had come), the maid whose soul, according to the old and beautiful idea, had been servered from his own, and whom, in all his vague but passionate desires, he yearned to meet.

———Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*.

What he meant, now, when he said, “The young man today have no interest in life” was that his young disciples, his admirers, had all gone, they **were grown** old and preoccupied, and had not been replaced. (彼らは年をとってしまっていた) の意で、完了に重きを置いた表現語法である。 ———Muriel Spark, *The Fathers' Daughters*.

Then they were gone (= had gone).

——William Faulner, *The Unvanquished*.

When I'm gone (= had gone) it will be easier on you.

——Id., *The Sound and the Fury*.

5. “be”動詞に対する 迂言的 (Periphrastic) “do”の用法

迂言的 “do” の表現とは小西友七編『現代英語語法辞典』276ページによれば、端的に言えば、「1語で簡潔に表せることを多くの語を用いて回りくどく、間接的に表現する修辞法」の一つであると述べている。更に詳しく、大塚高信氏及び中島文雄氏監修の『新英語学辞典』856-7ページには「理論的には単一の語形で示しうる文法形態を、ある言語内の形式的制約によって二つもしくはそれ以上の語を用いて示すことをいう」と説明し、迂言の *do* (periphrastic *do*) とは「助動詞 *do* を用いて疑問文や否定文を生成する場合をいう」と的確に述べられている。また大塚高信編『新英文法辞典』376ページには「迂言的な *do* が散文において現れるようになるのは1400年ごろからであり、また散文において広く用いられるようになるのは15世紀末ごろからである。」と詳しく歴史的に述べられている。Frederic G. Cassidy の *Dictionary of American Regional English (DARE)*, pp.175-176には *OED* からの説明を引用して、“*Be* continued in concurrent use till the end of the 16th century and still occurs as a poetic archaism, as well as in certain traditional expressions and familiar quotations of 16th century. . . Southern and eastern British dialect speech retains *be* both in singular and plural, as ‘I *be* a going, we *be* ready.’” と述べられている。又同辞典の p.177には次のような例も挙げられている。“The land *don't be* sandy. . . We *don't be* bothered with them . . .” 更にニューイングランドでは“The verb *be* . . . is still used after the ancient manner, I *be*, you *be*, we *be*, they *be*” と記述している。また George O. Curme も *Syntax*, p. 23で “In popular speech there is a tendency to employ the *do*-form with the copula *be* in declarative sentences, which is contrary to literary usage” と説明して次の例を挙げている。‘Some days she *do be* awful about her food’ (Dorothy Gerard, *The Eternal Woman*, Chapter XV). ここでこの語法について、迂言的 “do” の表現用法を更に分かりやすく言えば、この “be” 動詞を一般動詞並に見立てて疑問文であれば “do”, 否定文であれば “don't” を “be” 動詞の前につけて表現する方法である。勿論文法的には “be (is, am, are, was, were) + not” で十分でこの場合 “don't” をつける必要は全くない。

一般動詞の疑問文や否定文では普通文法規則として、“do” 助動詞を使って、現在形の疑問文であれば “Do ~?”, 過去形の疑問文であれば “Did ~?”, 否定文であれば、現代形は “do not ~,” 過去形は “did not ~” で表現するのが普通である。しかし近年アメリカ英語で

は、これが一般化現象をきたして希に“be”動詞の分野にまで適用されることがある。G. キルヒナー著『アメリカ語法事典』448ページに、「Allanによれば、(米)では完了時制を除き、そのあらゆる用法上、haveは常に迂言的doを用いる」と説明されている。即ち、“have”を使った疑問文や否定文は、“Do (Did) you have ~?, You do not (did not) have ~.”となる。しかしここでは“have”動詞の例のみが挙げられているが、希にこの言語現象が類推や錯覚から“be”動詞の分野にまで広がりを見せている。即ち、“be”動詞を一般動詞並扱いにして疑問や否定を表す時に、助動詞“do”を“be”動詞の前に用いて“do be ~?”, “don't be ~”で表現する語法である。

広岡英雄著『歴史的に見た英国国民の言語』242ページには「この迂言的doはShakespeareにも見られ、強調、感情の表現、リズムの調整のほかにI *do* assureのように意味がないと思われるようなところでも用いられている。しかしこれは今日の語感の上に乗っての解釈であるから、当時においては相当の意義を持っていたのかもしれない。やがてこのdoは17世紀をすぎると用いられなくなり、それ以後は今日におけると同様な肯定文の強調のdoとしてもっぱら用いられるようになった」と詳しく説明されている。また大塚高信氏は『シェイクスピア及聖書の英語』119ページで「この形(do + 動詞)は歴史的にみると、古代英語の時代から存在しており、14世紀に一般化し、16世紀には最も多く使われたのであるから、シェイクスピアや聖書の英語には用例が極めて多い」と述べている。更にもう少し説明を補足追加すると、市川三喜著『聖書の英語』10ページには次のような聖書からの例を挙げて説明している。

Archelaus *did reign* in Judaea in the room of his father Herod.

———*The Authorized Version of the Bible*, ii 22.

「単に“reigned”というべき場合に“did reign”という periphrastic form を用いることは聖書時代には普通であったが、今日は俗語か或いは Dorsetshire あたりの方言に残っている位のものである。Shakespeare にはミーターの都合でシラブルをます為によく使われたが今日でも同じ理由で詩に用いられ、詩に於ける語法の一つの特徴となっている。」と述べられている。

そうしてこの語法が類推から一般化現象を起こし“be”動詞の前にも用いられるようになったというのがこの語法の歴史的経緯である。栄枯盛衰は言語の世界においても同じで、現在のこの語の使用状況は主に限られた地域の層、例えば、どちらかと言うとアメリカ南部で多くこの語法の使用が認められるようだが、OED や EDD の説明や挙げられた用例から見ても、この語法はまぎれもなくイギリスの古い時代の英語の残存語法の1つである。

17世紀に入植が始まったアメリカでは、それ以来この語法には特に目立った大きな変化もなく、何故か今や廃れかかって危機に瀕した語法であるだけにその勢いも弱く、ほそほそと息長く何世紀にもわたって一般庶民の限られた層の人達の間でわずかに使い続けられて今日に至っているように思う。即ち、“do be, don’t be ~”の表現語法は現在の文法感覚からすれば、非文法的ではあるが、軽便な点から理屈抜きで現在でも十分使用もあり得るように思う。かつて筆者がアメリカの南部諸州、とりわけ Georgia, Alabama, Mississippi, Louisiana などの深南部 (the Deep South) をフィールドワーク (fieldwork 現地言語資料調査) で回った時に年配の黒人の老人の人達の会話に耳をそばだてて聞いていると、この語法が時々出てくるのを耳にしたことがあるようにふと思うからである。現在の傾向として使用者は教養の程度も極めて低い人達、それも南部の黒人層の高齢の人達に多く見られるように思う。言語の趨勢として、文法的にとらわれず、ひょっとすると馴染みやすさから或いは言いやすさから俗語として将来一般庶民にも受け入れられて、一般化して popular な語法になることがひょっとしてあるやもしれないが、今のところ、これから先のことは “Only God knows.”、即ち “Nobody knows.” である。

例を挙げると、

My biscuits . . . **don’t be** spongy like hers . . . ————*DARE*.

They **do be** getting all their bad ways again.

—————Joseph Wright, *The English Dialect Dictionary*.

The childer **do be** laffen at me. ————*Ibid.*

Lady I. A. Gregory やアイルランドの作家の作品の中にこの語法の使用例が多く見られる。この語法について市川三喜著『英文法の研究』210ページには、「このように Irish-English では “to be”+ present participle を単に progressive form ばかりでなく present, past など、普通の英語で simple form を用うべき場合に用いられている。これは他の dialect にもよくある現象である。」と説明している。

She was delayed with her washing; bleaching the clothes on the hedge she is, and she daren’t leave them, with all the tinkers that **do be** (= who are)passing to the fair.

—————Lady I. A. Gregory, *Spreading the News*.

. . . nets they had and they used to be spreading them in the swamps where the plover **do be**(= are)feeding. . . ————*Id.*, *The Jackdaw*.

It is little they are worth altogether; those mountainy boys **do be** poor.

——Id., *The Gaol Gate*.

It is of him I **do be** (= am) thinking every year, and I setting out of the house, and making a cake for the suppe. ——Id., *The Travelling Man*.

There's no one can drive a mountain ewe but the men **do be** reared(who are brought) in the Glenmalure, I've heard them say, and . . . ——*Ibid.*

I will not, Nora; I **do be** afeard of the dead. ——*Ibid.*

In the big world the old people **do be** leaving things after them for their sons and children, but in this place it is the young men **do be** leaving things behind for them that **do be** old. ——John M. Synge, *Riders to the Sea*.

. . . or to make the blind see as clear as the gray hawks **do be**(= hawks which are) high up, on a still day, sailing the sky. ——Id., *The Well of the Saints*.

There's no one can drive a mountain ewe but the men **do be** (= the men who are brought up)reared in the Glenmalure, I've heard them say, and above by Rathvanna, and the Glen Imaal—men the like of Patch Darcy, God spare his son, who would walk through five hundred sheep and miss one of them, and he not reckoning them at all.

——Id., *The Shadow of the Glen*.

主語が三人称単数の場合には“do be”が“does be”となる。

Is it myself, lady of the house, that **does be** walking round in the long nights, and crossing the hills when the fog is on them, the time a little stick would seem as big as your arm, and a rabbit as big as a bay horse, and a stack of turf as big as a towering church in the city of Dublin? ——John M. Synge, *The Shadow of the Glen*.

It's real wicked she **does be** when you hear her speaking as easy as that.

——Id., *The Tinker's Wedding*.

He **does be** (= is)lonesome now and again, and he is longing for a bird to put him in mind of old Ireland . . . but he is in dread it would die in the darkness . . .

——Lady I. A. Gregory., *The Jackdaw*.

Ah, there **does be** a great deal of gaps knocked in a twelvemonth.

——Id., *The Workhouse Ward*.

Terrible wicked he is; he's as big as five dogs, and he **does be**(= is)very strong.

——Id., *The Full Moon*.

Sometimes singing and dancing she **does be**, and sometimes troublesome.

——Id., *Ibid.*

His song that **does be** clogged through the daytime, the same as the sight is clogged with myself.

——Id., *Ibid.*

Terrible wicked he is; he's as big as five dogs, and he **does be** very strong.

——Id., *Ibid.*

It's seldom he **does be**(= is) late.

——Id., *Coats.*

尚、次例は資料収集中にたまたま、アメリカの現代文学作品から偶然発見した珍しい貴重な例である。勿論、文法的には正用法ではない。

“Then why **do you be** with me, if you like Jim better?”

——Richard Wright, *The Man Who Went to Chicago.*

上掲の文は言うまでもなく、文法的には、“be”動詞のはいった疑問文であるので、“Then why **are** you with me, if you like Jim better?”となるべきところであって、この場合、上例の文はたとえ疑問文であっても否定文であっても、助動詞“do”は全く不要である。このように“be”動詞の文を含め、およそ全ての場合に迂言的“do”を用いて、疑問や否定を表現する言い方であって、これは言わば総じて言語の一般化とも言うべき言語現象である。決して文法的には正用法ではないが、話し言葉では人間の潜在的な心に潜む心理として、“be”動詞を含む全ての疑問文や否定文にも適用範囲を広げて、ついつい無意識に錯覚から或いは類推から無教育者達の間で一般動詞並に扱い、迂言法的に“do”を用いて表現してしまうのである。言わば言葉の構造上、常に起こり得る普遍的な自然な言語現象としてあまねく一般化現象がよく発生することがある。これは紛れもなくイギリスの古い時代の英語の流れをくむ語法とはいえ、現在のところアメリカの文学作品などにまだそう多くの例を見つけることは出来ないが、言葉の表現の自由闊達な自然な流れとして、アメリカ南部諸地域の教育も極めて乏しい高齢者や黒人層の人達の間にも僅かに見られる表現語法だと言えよう。

しかしながら、*OED*、や Joseph Wright の *The English Dialect Dictionary* に挙げられた例から見て言えることは、17世紀に開拓者とともに新大陸のアメリカにイギリスの古い英語の言葉遣いが移植されて以来、現在に残る名残と思われる。今日では行き届いた教育事情からかつての往年の力強さはこの語法には見られず、廃れかかっている感が否めないが、このように話し言葉は話し手の側の自意識の流れに沿って時には類推や錯覚から、あるいはわざと周囲の注目を得るために決められた文法の枠組み範囲を飛び越えて言葉そのものの進化、変化、発展に一役を担い、一歩踏み出して大胆とも取れる方向に繋がっていくのは自然

な流れとして、常に Communication 間で話し手の側におこる人間の心理から生じた言語現象である。このように言葉は常に話し手の胸の奥底に秘められた微妙な感情の変化と共に絶えず言葉に彩りを添え、進化し、言葉遣いそのものの流れを誘発して、決して未来永劫にいたるまで言語は不変化であり続けることはあり得ず、またその変化の歩みを止めることは出来ないが、現在も使われている17世紀の頃の古語語法の中には古い時代の表現語法に固執して、理屈ぬきで簡単な点からまた機械的に言いやすいという利便性から教育の乏しい黒人層や一般庶民の高齢者層の人達の間深く定着して時代を超えてほそほと息長く使い続けられているという言葉の持つ保守的な一面がかいま見られる典型的な例の1つだと言える。

6. 進行形“be + ~ ing”の様々な様態

6-1 「be 動詞+ being + 名詞, be 動詞+ being + 形容詞」

普通は進行形にしないが、状態を表すのではなく、心理的に一時的な努力や行動を意図的におこなっていることを敢えて聞き手に強く訴えることに重点をおいて感情的に表現する時に口語英語ではしばしば進行形の形をとる。即ち、一時的な性質や現象を表す時に「be + being + 名詞 (形容詞)」で表し、書き言葉の上でも、文書表現に生き生きとした生氣と心に秘めた感情的な色彩を添える効果がある。例えば、He is kind. と言えば、「彼は(性格としていつも)親切である。」という意味であり、生まれ持ったその人の永久的な性質を表し、またあることを一時的にその人が意図的に行っていることを強調して表現する場合には、He is being kind. 「彼はつとめて親切にふるまっている。」と言う。話し手のその時、その場での感情的な一時的色彩を帯びた行為を強調して言葉の上を表す。このように微妙な人間の感情の変化の起伏を「be + being + 名詞又は形容詞」で赤裸々に言葉の上にはっきりと映し出す表現である。以下に文学作品からその用例を挙げると、

“You are being very absurd, Laura,” she said coldly.

(「ロウラ、あなたは何だかいつもと違ってだいぶおかしいわよ」と彼女は冷ややかに言った。)

——Katherine Mansfield, *The Garden-Party*.

“Mrs. Hoffman wants a can Cheek Keeng Awr Lar Keeng,” I said slowly, hoping he would not think I was being offensive.

(こんな言い方をして相手の方の気に障ることがないように)

——Richard Wright, *The Man Who Went to Chicago*.

I'm not being sarcastic but quite truthful, because in the end it is only truth you can stand.

(わざと皮肉な言い方をしているんじゃないんですの)

——Joyce Carol Oates, *Out of Place*.

I'm not being ironic.

(わざと皮肉っぽくしているわけではありませんよ)

——Id., . . . & *Answers*.

“He calls me names, he’s filthy, got a filthy mouth—that’s **being smart**, huh?”

(「ふん、彼はそれで分別があるつもりなんだろうよ」)

——Id., *In the Region of Ice*.

I think you’re **being** extremely **practical and sensible**.

(いつになく君は実務的だと私は思うよ)

——Kingsley Amis, *Who or What Was It?*

He’s **being a good boy** this afternoon, he promised.

(今日の午後はつとめておとなしくしていますと、彼は約束した)

——Richard Wright, *Big Black Good Man*.

The light from the bandstand spilled just a little short of them and, watching them laughing and gesturing and moving about, I had the feeling that they, nevertheless, **were being** most **careful** not to step into that circle of light too suddenly: that if they moved into the light too suddenly, without thinking, they would perish in flame.

——James Baldwin, *Sonny’s Blues*.

Buyers of dryland, unimproved, miles-from-nowhere, building lots who cannot qualify for inclusion in either category **are being optimistic** at their own risk.

——Erskine Caldwell, *Around About America*.

“I don’t know what got into me, sir. I didn’t mean it. I **was just being funny**.”

(「私はただふざけていたんです」)

——John Steinbeck, *The Leader of the People*.

He spoke quietly and courteously; nevertheless they realized, after a short pause in which their minds groped for the meaning of his words, that he **was being** definitely **insulting**.

(彼は確かに侮辱していたのだ)

——John Wain, *Hurry on Down*.

6-2 過去進行形が叙述に生氣を与える用法

Someone **was telling** me to read Engel’s *Marriage and the Family*.

——Norman Mailer, *The Patron Saint of Macdougall Alley*.

普通一般には“Someone told me”と言うところ、

I was wondering (= wondered) to see them in it a while ago.

——Lady I. A. Gregory, *Spreading the News*.

That is great news Mrs. Tarpey was telling (= told) me!

——*Ibid.*

市川三喜氏はこの語法について、『英文法研究』209ページで「このように Irish-English では “to be”+ present participle を単に progressive form ばかりでなく present, past など、普通の英語で simple form を用いるべき場合に用いている。これは他の dialect にもよくある現象である」と説明している。

6-3 現在進行形が “always” を伴う場合には特殊な習癖を表す。

Why is the boy **always disappearing**, why don't you find him, you haven't a job, you just sit around, you might keep him near you, you might teach him to be like you, and . . .

——Norman Mailer, *Maybe Next Year*.

6-4 二人称、三人称の主語に伴う進行形は話者の命令を表す。

“Listen, I been losing dough. You're **playing**.”

——Id., *The Greatest Thing in the World*.

「お前はゲームをやるんだ」の意。

6-5 瞬間相の動詞 “open” の進行形は「まさに～しようとする」の意を表す。

I was **opening** a pack of cigarettes when I heard the station master talking on the phone again.

——James Thurber, *The Thurber Carnival*.

6-6 進行形は弱い、穏やかな命令を表すことがある。

There now —you're **holding** him gently.

——Tennessee Williams, *The Glass Menagerie*.

「彼をそっと支えてやって下さい」

6-7 進行形で未来形を表すことがある。

I'm increasing (= I'll increase) your tip to five dollars in return for a favour which is not to remember that you have recognized me or anything else at all.

——Id., *Sweet Bird of Youth*.

1930年代のアメリカ文学の最高傑作と評される John Ernst Steinbeck (1902-1965) の代表作, *The Grapes of Wrath* 『怒りの葡萄』が世に発表されて、彼が1940年に the Pulitzer Prize, 1962年に the Nobel Prize を受賞した同作品の中で、登場人物の口を借りて話し言葉（方言）について次のように言及している箇所がある。

“Ever’body says words different,” said Ivy. “Arkansas folks says ’em different, and Oklahomy folks says ’em different. And we seen a lady from Massachusetts, an’ she said ’em differentest of all. Couldn’t hardly make out what she was sayin’.”

——John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*.

たとえその人自身の “idiosyncrasy” 「その人自身が持っている特有な言葉づかい」などに見られる癖や特性が何であれ、生まれ育った土地で知らず知らずのうちに自然と培われ身についたその土地独特のそれと分かる話し言葉（訛り）は、意識しようとしまいとにかかわらず、話し始めると無意識のうちに言葉の端々にその土地特有の話し言葉の特徴が口について出てくるものである。元来、アメリカ人は誰しも居住環境について大なり小なり押さえがたい強い願望が常にあるようである。そのため、少しでもより快適な居住環境を得るためには多少の犠牲をはらってでも決して労はいとわないところがある。具体的に言うと、それまで住み慣れた田舎の小さな不便な村からより便利の良い住宅環境が整った大都市へ、年老いて身に應える寒冷地からカリフォルニアやフロリダなどのより温暖な土地へと、彼らのささやかな希望と夢を実現するために絶え間なく住居移転を繰り返す傾向がある。従って彼らアメリカ人にとって少しでもよりよい居住環境を獲得するのが幼少の頃からの彼らの体にしみついた永年の願望、言わば彼らアメリカ人が持って生まれた固有の遺伝子とも言うべき習性なのである。その為の大なり小なりよりよい居住環境を求めて親から子、子から孫へと性懲りもなく、彼らの押さえがたいささやかな希望と夢を実現するために、たとえ少々の犠牲を払ってでもいそいそと希望に胸を膨らませて転居を繰り返す性癖を持っている。

そうしてそうこうしているうちに昔と違って今日のように高度な技術革新と交通・通信機関の驚異的な発達で、小さな辺鄙な山村のちょっとした事件もあっという間に全世界に伝わる

ご時世ともなれば、以前にははっきりとそれとなく認められた各地の彼らの出身地独特な、特徴のある、誰の耳にもそれと分かるお国言葉（その土地特有の地域言語、方言）が住居移転と世代を繰り返すうちにいつの間にか角が取れ、方言色も薄まって、移り住んだ土地の言葉といつしか融合合体して、次第に姿を消して同化されていくのは避けられない自然な成り行きである。現在アメリカ各地に存在する方言が将来完全にアメリカの国土から姿を消して、消滅してしまうことは、たとえ万が一にも無いにしても、Stuart Berg Flexner氏が*I Hear America Talking*, pp.119-120で言っているように将来的にはひょっとすると、現在あるアメリカの四大方言（北部、南部、中部、西部）のそれぞれの際だった特徴のある話し言葉（発音、方言の特徴を表す抑揚、訛り、語彙、語法）もやがて角がとれて薄れていき、各方言間のそれまでの顕著な違いも次第に認識出来なくなり、そのため、最後に残る究極の方言区分は氏によれば、都会に住む教養のあるアメリカ人の話し言葉と大都市から遠く離れた辺鄙なうら寂れた田舎に住む貧しい教養のないアメリカ人の話し言葉の二極化に分かれてしまうかもしれないという氏の説には筆者も大いに関心があり、一部共鳴するところがある。最後にStuart Berg Flexner氏の*I Hear America Talking*, pp.119-120からアメリカ人の祖先がアメリカに移住を開始した17世紀初頭の頃の母国イギリスでの言語の実態から21世紀に向けての将来的な言葉の移移・変遷していく過程に至る変化の展望について、言語学者としての同氏の興味深い卓越した御高説にしばし耳を傾聴する価値が大いにある。念のため参考までにその件を引用して本稿の締めくくりとする。

Early Americans had more sharply differentiated dialect than we do today. The puritans in New England spoke the English East Anglia dialect, the Quakers in Pennsylvania spoke the English midland dialect, the Scotch-Irish in the Blue Ridge Mountains spoke the Ulster dialect, etc. —and they and their speech patterns were separated by wilderness, bad roads, and lack of communications. Then our geographical and social mobility began to homogenize the language, with people from all regions moving to all others, people from all walks of life mixing and mingling. . . . We Americans are still moving and communicating from one part of the country to another. As easterners and midwesterners continue to move to the sun belt (1950s) the local Florida and Texas speech patterns will be diluted; as people continue to leave large cities for small one and for rural areas, pockets of local dialects will tend to weaken or disappear. Perhaps some day in the future regional dialects will be no more. Then we may have only two dialects, that of educated, urban Americans and that of rural and poor Americans. Such dialects already exist, heard mainly in

grammar and usage. The rural and the poor are more apt to use such forms as *I has, he come, he knowed, she done*, etc., double negatives such as *He don't have none*, and words such as *ain't, irregardless* (1912), and *misremember* (about 1915)—as well as regional pronunciations. Educated urban speakers are more apt to add -ly to their adjectives (slowly instead of slow, though both are correct), use less slang, more foreign borrowings, more modifiers, longer words, and more complex sentence structures.

——Stuart Berg Flexner, *I Hear America Talking*.

参考文献

- 荒木一雄他（1982）『新英語学辞典』研究社出版。
 安藤貞雄（1989）『英語語法研究』研究社出版。
 石橋幸太郎他（1972）『現代英語学事典』成美堂。
 市川三喜（1954）『英文法研究』研究社出版。
 ——（1967）『聖書の英語』研究社出版。
 ——編（1955）『英語学辞典』研究社出版。
 井上義昌（1966）『詳解英文法辞典』開拓者。
 ——（1960）『英米語用法辞典』開拓者。
 上本明（1972）『現代英語の用法』研究社出版。
 大塚高信（1958）『英文法論考』研究社出版。
 ——（1958）『シェイクスピア及び聖書の英語』研究社出版。
 ——編（1961）『英語慣用法辞典』三省堂。
 ——編（1970）『新英文法辞典』三省堂。
 大橋栄三（1969）*Huckleberry Finn* 研究社出版。
 尾上政次（1957）『現代米語文法』研究社出版。
 貴志謙仁訳（1946）『カーム英文法』篠崎書林。
 小西友七（1977）『現代英語の文法と背景』研究社出版。
 ——（1982）『アメリカ英語の語法』研究社出版。
 ——編（2006）『現代英語語法辞典』三省堂。
 後藤弘樹（1993）『Mark Twain のミズーリ方言の研究』中央大学出版部。
 ——（1998）『アメリカ英語方言の語彙の歴史的研究』中央大学出版部
 ——（2004）『アメリカ北部英語方言の研究』双魚舎。
 ——（2005）『アメリカ中部方言の研究』（私家版）。
 ——（2007）『アメリカ北部方言の研究』改訂版（私家版）。
 ——（2007）『アメリカ南部方言の研究』（私家版）。
 ——（2010）『アメリカ西部方言の研究』（私家版）。
 沢田敬也（1984）『アメリカ文学方言辞典』オセアニア出版。
 清水護編（1973）『英文法辞典』培風館。

- 杉山忠一 (1998) 『英文法詳解』 学習研究社。
- 竹林滋他 (2002) 『新英和大辞典』 第六版 研究社出版。
- 中島俊雄他 (1968) 『立体・アメリカ文学』 朝日出版社。
- 中島文雄他 (1969) 『岩波英和大辞典』 岩波書店。
- 広岡英雄 (1969) 『歴史的に見た英国民の言語』 篠崎書林。
- 前島儀一郎他共訳 (1983) 『アメリカ語法事典』 大修館書店。
- 松波有他 (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店。
- 若田部博哉 (1985) 『英語学大系』 IIIB 大修館書店。
- 渡貫陽他 (2000) 『徹底例解ロワイヤル英文法』 旺文社。
- Algeo, John. edited (2001), *The Cambridge History of The English Language*, Vol. VI. Cambridge: University Press.
- Bartlett, John Russell (1859), *Dictionary of Americanisms*, Boston: Little, Brown and Compny.
- Burchfield Robert (1985), *The English Language*, Oxford: Oxford University Press.
- Cassidy, Frederic G. and Joan Houston Hall (1996), *Dictionary of American Regional English*, Mass: Martin's Press and Company.
- Curm, George O. (1931), *Syntax*, Boston: D. C. Heath And Company.
- Evans, Bergen and ornelia Evans (1957), *A Dictionary Of Contemporary American Usag*, New York: Random House.
- Flexner, Stuart Berg (1976), *I Hear America Talking*, New York: Van Nostrand Reinhold Company.
- Follett, Wilson (1966), *Modern American Usage*, New York: Hill & Wang.
- Fowler, H.W. (1966), *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford: Oxford University Press.
- (1952), *A Dictionary of Modern American Usage*, Oxford: At The Clarendon Press.
- Gregory, Lady I. A (1930), *Spreading the News Hyacinth Halvey & Other Plays*, Tokyo: Kenkyusya.
- Hendrickson, Robert (2000), *The Facts on File Dictionary of American Regionalism*, New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- (2000), *American Regionalisms*, New York: Facts On File, Inc.
- Jespersen, Otto (1965), *A Modern English Gramma*, London: George Allen & Unwin Ltd.
- Marckwardt, Albert H. (1958), *American English*, New York: Oxford University Press.
- Revised by J. L. Dillard. (1980), *American English*, New York: Oxford University Press.
- Mencken, H. L. (1936), *The American Language*, New York: Alfred A. Knopf.
- (1945), *The American Language: Supplement one*, New York: Alfred Knopf.
- (1948), *The American Language. Supplement two*, New York: Alfred Knopf.
- Murray, James A. H. & Others (1970), *The Oxford English Dictionary*, Oxford: The Clarendon Press.
- Nicholson, Margaret (1957), *A Dictionary of American English Usage*, New York: Oxford University Press.
- Perrin, Porter G. (1963), *Writer's Guide and Index to Englis*, Chicago: Scott, Foresman and Company.
- Randolph, Vance and George P. Wilson (1953), *Down in the Holler*, Norman: University of Oklahoma Press.
- Reed, C. E. (1967), *Dialects of American English*, Ohio: The World Publishing Company.
- Steinbeck, John Ernst (1967), *The Grapes of Wrath*, New York: Viking Penguin Inc.
- Wentworth, H. (1944), *American Dialect Dictionar*, New York: Thomas Y. Crowell Company.
- Wright, Joseph (1970), *The English Dialect Dictionary*, Norwich: Fletcher & Son Ltd.